

School Amenity

10

Vol.30/No.355
2015
voi-X

木造・木質系校舎を見るⅣ

New Face21

施設一体型の小中一貫教育推進校へ全面改築

廿日市市立大野西小学校・大野中学校 (大野学園：広島県)

地域環境を活かした木造園舎

はくすい保育園 (社会福祉法人 誠友会：千葉県)

夢を実現する力を育む新校舎

東京都市大学 塩尻高等学校 (長野県)

LIFE-LONG LEARNING SPACE

生涯学習空間



地域がつくる、地域をつくる

学校を取巻く地域の姿について、2つの取組を取り上げたい。様々な場面で「地域の力」とはよく使うが、言葉の持つイメージが広すぎて漠然としている人もいないか。一例として参考にしてもらえればと思う。

きっかけは学校から

10年と少し前、加害者も被害者も小学生、現場は小学校という今でも目を背けたくない事件が起きた。社会は「ゲームの思考」、「情報リテラシーの重要性」など様々な角度から事件について迫ったが、本当に目を向けなければならないのは、都市化の進む現代にあって「生命」を感じる機会が著しく限られた、子どもたちの「実感の乏しさ」ではないか。開発された住宅地域では、かつてのように日常のあそびの中で得てきた自然体験や子ども同士の人間関係などが手の届かない貴重なものとなってしまっている。このように考えた町田市立つくし野小学校の当時の学校長が保護者や地域に働きかけて「自然と生命をいとおしく感じる体験を都市に育つ子どもたちにも」と始まったのが「町田市立つくし野小学校ビオトーププロジェクト」（当時：平成27年度より「つくし野ビオトーププロジェクト」に名称変更）である。



つくし野ビオトーププロジェクト。部屋の前方で立っている全員がスタッフ

取組みを始めて10年目

当時の活動をプロジェクトのブログから振り返ると、学校内の環境を活用してカブトムシをはじめとした生き物の育成を柱の一つとして始めたことがわかる。先日は、毎年欠かさず行っている「カブトムシ相撲つくし野場所」が行われた。

10年と言葉では一言で済んでしまう時の経過は、地域の一つの特徴がこの活動から見えていないかと感じるようになった。それは、地域の持つ継続性である。プロジェクトが始まった平成18年のつくし野小新入生は現在高校1年生であり、6年生に至ってはすでに成人している。教職員も人事異動などがあり、未だに残っている人がいるとは考えにくいし、異動後に元の学校で続けるのも難しい。しかし、地域・住民によるプロジェクトの主なスタッフは変わらない。10年前のブログにも書かれている人が、7月にはカブトムシの育て方を説明していたし、今月（9月）



手づくりの土俵でカブトムシ相撲大会を開催

も活動の準備を行い、子どもたちの自然体験活動を支えている。

続くからこそその力

この間、地域の人びとが継続して取組むことの良さを目にできている。まずは、地域を知っていること。地域で、この取組に力となる人、活用できる場所や道具などの資源を予め知っている。もしくは知る機会を得やすい。都内というだけで開発された街のイメージが強いが、活動を通して、「こんな場所があるのか（あるいは人がいるのか）」と感ずることがある。同時に、様々な得意分野を持った人が、自分なりの強みを活かして活動を支えていることもみえてくる。

また、繰り返されることによる改善は、継続されていればこそである。カブトムシ相撲はその典型ともいえ、10年の間に土俵は2回変わり、種目も3つある。8年目に初めて訪問した時はもう完成された形となっていたが、それまでには土俵以外にも細かい点での変更が繰り返されて今の



活動前には地域の方による準備が念入りに行われている

スタイルになったと聞いている。毎年夏休みの季節になると各地のカブトムシ相撲の話題を目にするが、よくみると、木の早登りを相撲とっている場合もある。プロジェクトでもそのような時期があり、今も早登りとして残っているが、見た目が地味に映ることや、名前の通り相撲をしたいと他校とそのおやじの会と協働で考え出したのが今のやり方である。カブトムシが1対1で向き合う状況を無理なくつくることのできるため、本気でツノを付き合わせたときに「ガチッ」という音がする勝負自体は大人も夢中になることができるものだ。

変わらないことが変えるもの

そして、今また起きていることがある。活動の広がりだ。当初小学校主導で始まったプロジェクトである。活動主体が小学校から地域に移ってからも参加に条件を設けていたわけではないが、ある意味、小学校区内の活動としてつくし野小学校の児童とその家族の参加がすべてともいえた。ところが、今年はスタッフ間で他校（園）の参加が多いといわれている。校区を接する小学校や付近の私立小学校、さらには幼稚園や保育園など。つくし野で自然体験のできる活動をやっていて、子どもは誰でも参加できるということが定着し広がっていることを目の当たりにしているようなのだ。

同じことは運営側にもいえ、元保護者や卒業生をはじめ地域で環境教育に関する活動をしてきた方など、やはり地域をキーワードにした人びとが集まって来ている。このことを今年は特に感じるのである。



ヤゴをトンボに羽化させる活動も毎年続いている

新しい街の魅力は学校教育

茨城県牛久市のひたち野地区は、牛久市北部、つくば市との境に位置する新しい街である。昭和60年につくば市を会場に行われた科学万博、「国際科学技術博覧会」の終了後から開発の話自体はあったが、具体的に動き出したのはこの10年ほどである。そして平成22年4月、ひたち野うしく小学校が開校して一気に動き出した。

同小は、ひたち野地区を東西に二分するJR常磐線の停車駅、「ひたち野うしく」駅から北に徒歩で10分ほどの場所にある。開校した年はまだまだ周囲に空き地が広がり、特に駅周辺は建物よりも更地の方が多かった。それらの場所に（集合）住宅や商業施設が次々につくられ、小学校は毎年100人規模で大きくなってい



つくし野の地域全体をビオトープとみた活動を展開

た。この小学校には訪れる機会を何度かいただいているが、その度に街の印象が変わっていったことを記憶している。そして、ひたち野地区の場合には、ひたち野うしく小学校の評判を聞いて住まいを構えたという声を耳にする。開校から6年目を迎えた今も、未だにその声は聞こえている。

学校を中心とする仕組みづくり

牛久市は、ひたち野うしく小学校校区に小学校以外の公共施設を整備し



牛久市立ひたち野うしく小学校
(昨年9月撮影)

話題を追って

地域がつくる、地域をつくる

学校を取巻く地域の姿について、2つの取組を取り上げたい。様々な場面で「地域の力」とはよく使うが、言葉の持つイメージが広すぎて漠然としている人もいないのではないかと。一例として参考にしてもらえればと思う。

きっかけは学校から

10年と少し前、加害者も被害者も小学生、現場は小学校という今でも目を背けなくなる事件が起きた。社会は「ゲームの思考」、「情報リテラシーの重要性」など様々な角度から事件について追ったが、本当に目を向けなければならないのは、都市化の進む現代にあって「生命」を感じる機会が著しく限られた、子どもたちの「実感の乏しさ」ではないか。開発された住宅地域では、かつてのように日常のあそびの中で得てきた自然体験や子ども同士の人間関係などが手の届かない貴重なものとなってしまっている。このように考えた町田市立つくし野小学校の当時の学校長が保護者や地域に働きかけて「自然と生命をいとおしく感じる体験を都市に育つ子どもたちにも」と始まったのが「町田市立つくし野小学校ビオトーププロジェクト」(当時：平成27年度より「つくし野ビオトーププロジェクト」に名称変更)である。



つくし野ビオトーププロジェクト。部屋の前方で立っている全員がスタッフ

取組みを始めて10年目

当時の活動をプロジェクトのブログから振り返ると、学校内の環境を活用してカブトムシをはじめとした生き物の育成を柱の一つとして始めたことがわかる。先日は、毎年欠かさず行っている「カブトムシ相撲つくし野場所」が行われた。

10年と言葉では一言で済んでしまう時の経過は、地域の一つの特徴がこの活動から見えていないかと感じるようになった。それは、地域の持つ継続性である。プロジェクトが始まった平成18年のつくし野小新入生は現在高校1年生であり、6年生に至ってはすでに成人している。教職員も人事異動などがあり、未だに残っている人がいるとは考えにくいし、異動後に元の学校で続けるのも難しい。しかし、地域・住民によるプロジェクトの主なスタッフは変わらない。10年前のブログにも書かれていた人が、7月にはカブトムシの育て方を説明していたし、今月(9月)



手づくりの土俵でカブトムシ相撲大会を開催

も活動の準備を行い、子どもたちの自然体験活動を支えている。

続くからこそその力

この間、地域の人びとが継続して取組むことの良さを目にできている。まずは、地域を知っていること。地域で、この取組に力となる人、活用できる場所や道具などの資源を予め知っている。もしくは知る機会を得やすい。都内というだけで開発された街のイメージが強いが、活動を通して、「こんな場所があるのか(あるいは人がいるのか)」と感ずることがある。同時に、様々な得意分野を持った人が、自分なりの強みを活かして活動を支えていることもみえてくる。

また、繰り返されることによる改善は、継続されていけばこそである。カブトムシ相撲はその典型ともいえ、10年の間に土俵は2回変わり、種目も3つある。8年目に初めて訪問した時はもう完成された形となっていたが、それまでには土俵以外にも細かい点での変更が繰り返されて今の



活動前には地域の方による準備が念入りに行われている

スタイルになったと聞いている。毎年夏休みの季節になると各地のカブトムシ相撲の話題を目にするが、よくみると、木の早登りを相撲とっている場合もある。プロジェクトでもそのような時期があり、今も早登りとして残っているが、見目が地味に映ることや、名前の通り相撲をしたいと他校とのおやじの会と協働で考え出したのが今のやり方である。カブトムシが1対1で向き合う状況を無理なくつくることのできるため、本気でツノを付き合わせたときに「ガチッ」という音がする勝負自体は大人も夢中になることができるものだ。

変わらないことが変えるもの

そして、今また起きていることがある。活動の広がりがだ。当初小学校主導で始まったプロジェクトである。活動主体が小学校から地域に移ってからも参加に条件を設けていたわけではないが、ある意味、小学校区内の活動としてつくし野小学校の児童とその家族の参加がすべてともいえた。ところが、今年はスタッフ間で他校(園)の参加が多いといわれている。校区を接する小学校や付近の私立小学校、さらには幼稚園や保育園など。つくし野で自然体験のできる活動をやっていて、子どもは誰でも参加できるということが定着し広がっていることを目の当たりにしているようなのだ。

同じことは運営側にもいえ、元保護者や卒業生をはじめ地域で環境教育に関する活動をしてきた方など、やはり地域をキーワードにした人びとが集まって来ている。このことを今年には特に感じるのである。



ヤゴをトンボに羽化させる活動も毎年続いている

新しい街の魅力は学校教育

茨城県牛久市のひたち野地区は、牛久市北部、つくば市との境に位置する新しい街である。昭和60年につくば市を会場に行われた科学万博、「国際科学技術博覧会」の終了後から開発の話自体はあったが、具体的に動き出したのはこの10年ほどである。そして平成22年4月、ひたち野うしく小学校が開校して一気に動き出した。

同小は、ひたち野地区を東西に二分するJR常磐線の停車駅、「ひたち野うしく」駅から北に徒歩で10分ほどの場所にある。開校した年はまだまだ周囲に空き地が広がり、特に駅周辺は建物よりも更地の方が多かった。それらの場所に(集合)住宅や商業施設が次々につくられ、小学校は毎年100人規模で大きくなっていっ



つくし野の地域全体をビオトープとみた活動を展開

た。この小学校には訪れる機会を何度かいただいているが、その度に街の印象が変わっていったことを記憶している。そして、ひたち野地区の場合には、ひたち野うしく小学校の評判を聞いて住まいを構えたという声を耳にする。開校から6年目を迎えた今も、未だにその声は聞こえている。

学校を中心とする仕組みづくり

牛久市は、ひたち野うしく小学校区に小学校以外の公共施設を整備し



牛久市立ひたち野うしく小学校(昨年9月撮影)